

講演会 報告書

福島の今を伝える講演会

「地域ではぐくむ創造の芽吹き」

～住みたい 訪れたい

離れていてもかかわりたい地域であるために～

開催日：2017年1月14日（土）

記録： 認定 NPO 法人かながわ 311 ネットワーク

かながわ「福島応援」プロジェクト (kfop)

作成： かながわ「福島応援」プロジェクト (kfop)

2017年2月1日発行 不許複製・禁無断転載

1. はじめに

東日本大震災と東京電力福島第一原発事故から6年近くたちますが、原発事故による暮らしへの影響は、物理的、精神的にもまだ続いています。一方で避難指示の解除は徐々に進み、また福島県による自主避難者への応急仮設住宅（みなし仮設）の無償供与の打ち切りが2017年3月末に迫っています。事業者に対する営業賠償もまもなく打ち切られるなど、さまざまな決断を迫られる時期を迎えています。しかし、おひとりおひとり抱える事情は異なります。その地にとどまる・離れる、元の地域に戻る・帰らない、別の地に生活や事業の拠点を移す・移さないを選ぶのは簡単なことではなく、行政の動き、ニュース、周囲の人の行動など、さまざまな要因で気持ちは揺れ動きます。

被災地域における社会インフラの再構築、徹底した除染、医療・福祉の充実、就業、就学など、多くの市町村が共通して抱える課題については周知のとおりで、行政と民間が協力しながら取り組んでいる途上にあります。

そうした大きな取り組みが続けられている一方で、地域や人に根ざした民間ならではのさまざまな取り組みも生まれてきています。

かながわ「福島応援」プロジェクト（kfop）では、現地を訪れてその現状や課題を知り、それを自分たちの地域や周囲の人に伝えていくことを事業の柱のひとつに挙げています。

前述のような課題の中で、民間レベルで懸命に取り組んでいる人をお招きし、目指すものについてお聞きし、また新しいヒントを出し合える場、気づきの場にしたいと考え、講演会を企画しました。その地域が「住みたいところ」、「訪れたいところ」、「離れていてもかかわりたいところ」であるために、どのような可能性があるのでしょうか。

この講演会が、何が正しく何が間違っているかという議論ではなく、お互いの価値観を尊重しながら、それぞれに共有や協力のできるポイントを見つけることのきっかけになればと願っています。

併せて、この講演会の開催を通じて以下の効果を狙いました。

- ・ 震災と原発事故の影響を受けた地域の現在の課題を、神奈川の方々に伝える
- ・ 課題の中で地域の魅力を創出、再発見しようとする取り組みについて知る
- ・ 被災地とボランティアという関係にとどまらない、多様なかかわりかたのヒントを得る
- ・ 参加者にそれぞれの経験、知見、スキル等を共有してもらう
- ・ 参加団体間で経験と強みを共有するきっかけを作り、今後の連携の可能性を探る

2. 開催概要

(1) 日時・式次第

開催日時	2017年1月14日（土）16:00～19:00
会場	神奈川県立かながわ県民センター 2階ホール 神奈川県横浜市神奈川区鶴屋町2-24-2（JR横浜駅 徒歩5分）
タイトル	福島の今を伝える講演会「地域ではぐくむ創造の芽吹き」 ～住みたい、訪れたい、離れていてもかかわりたい地域であるために～
登壇者	下枝浩徳さん（葛尾村、葛力創造舎代表） 廣田拓也さん（二本松市、NPO法人リーフ理事長） 和田智行さん（南相馬市、小高ワーカーズベース代表）
対象	一般市民（神奈川県在住者、ボランティア参加者、避難者等）
共催	かながわ「福島応援」プロジェクト（kfop） NPO法人かながわ避難者と共にあゆむ会 認定NPO法人かながわ311ネットワーク かながわ災害ボランティアバスチーム
協力	一般社団法人葛力創造舎 株式会社小高ワーカーズベース 株式会社GNS 特定非営利活動法人リーフ（Leaf） 神奈川県立かながわ県民活動サポートセンター 特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会 かながわ東北ふるさと・つなぐ会 公益社団法人日本青年会議所関東地区神奈川ブロック協議会
協賛	azbil みつばち倶楽部 シティアkses株式会社
後援	福島県 南相馬市 二本松市 葛尾村 社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会 一般財団法人神奈川県建築安全協会
その他	・会場内で共催団体・協力団体による資料展示を同時開催（13:00～19:00） ・講演会終了後に近隣の飲食店で講師を交えた懇親会を開催（19:00～21:00）

式次第

- 〔ご挨拶〕16:00～
 神奈川県立かながわ県民活動サポートセンター所長 坂井雅幸 氏
- 〔主旨説明・現状報告〕16:05～
 かながわ「福島応援」プロジェクト (kfop) スタッフ
- 〔講演〕16:20～17:20
 下枝浩徳 氏 (葛尾村、一般財団法人 葛力創造舎代表)
 廣田拓也 氏 (二本松市、株式会社 GNS 常務取締役、NPO 法人リーフ理事長)
 和田智行 氏 (南相馬市、株式会社 小高ワーカーズベース代表)
- 〔パネルディスカッション〕17:25～18:00
- 〔質疑応答・意見交換〕18:00～18:25
 進行:鈴木まり子 氏 (特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会 フェロー)
- 〔閉会〕18:30
- 〔名刺交換〕18:30～18:45

(2) 参加者実績

講演会 94 人 (うち登壇者・スタッフ 24 人、一般 70 人)
 懇親会 42 人



(3) 登壇者略歴

◆下枝浩徳さん

一般社団法人 葛力創造舎代表理事。福島県双葉郡葛尾村出身。

東京都の一般企業で働いたあと 2011 年に故郷の福島県に U ターン、福島県内で地域コーディネーターとして人脈を広げ、現地や首都圏での交流イベントにも力を入れる。原発避難により急激に人口が減った地域において互助コミュニティの再構成となりわいづくりを行う。避難指示が解除された葛尾村での盆踊り復活もコーディネート。

◆廣田拓也さん

福島県二本松市出身。株式会社 GNS 常務取締役、特定非営利活動法人リーフ（Leaf）理事長。

一部上場企業に勤務後、兄が会社を設立したことに伴い二本松に U ターン。順調に売上が伸びてきたところで東日本大震災が発生。既存の事業モデルが崩れ、一部事業の方向転換を図る中で Leaf を設立。生産者と共に日々奔走している。

◆和田智行さん

株式会社 小高ワーカーズベース代表取締役。福島県南相馬市小高区出身。

震災前、東京の IT ベンチャー2 社の役員を務めながら南相馬市で個人事業を営むワークスタイルを確立。2014 年 5 月に避難区域初となるシェアオフィス「小高ワーカーズベース」をオープン。100 の地域課題から 100 のビジネス創出を目指す。

◆鈴木まり子さん（進行役）

特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会（FAJ）フェロー。静岡県浜松市出身。

FAJ 災害復興支援室のメンバーとして、被災地で話し合いや会議の企画や進行などファシリテーションを活用した支援を行っている。南相馬市小高区で継続的に活動しているほか、熊本や地元・浜松でも積極的に活動している。

3. 詳細

全体の流れとして、開会挨拶、kfp スタッフによる主旨説明、現状説明の後、3 名の登壇者よりご講演いただいた。続いて、参加者でランダムに 3 人ずつのグループを作ってもらい、感想を話し合ってもらくとともに、「これを聞いてみたい」という質問をまとめて紙に書いて出してもらった。それらの質問を元に、パネルディスカッションが進められた。

(1) 主旨説明

東日本大震災から 7 年目を迎え、状況の変化に伴い被災者はさまざまな決断を迫られているが、普通の当たり前の生活をするのはまだまだ大変な状況。さまざまな課題について認識が必要。今回は地元で民間ならでの取り組みをしている 3 人の方をお招きした。何が間違っていて、何が

正しいということではなく、互いの価値観を尊重し、共有し、考えていただくきっかけの場にした
い。ボランティアだけでない関わり方、神奈川でも参考になることはあると思う。名刺交換の時間
を活用してほしい。

(2) 現状説明

福島の抱える問題を手短かに整理した。

- ・ 根底にある不安。震災に加え東電福島第一原発事故による複雑化。放射能汚染への恐怖。
- ・ 避難区域にまつわる経緯。旧警戒区域が3つに再編され、同一市内で異なる区域割りになった。
区域外にも線量が高い地点はあり、自主避難している人にはケアが行き届きにくい。福島県に
よる自主避難者への借り上げ住宅の無償提供は2017年3月で打ち切り。
- ・ 避難指示解除。帰還する、しないの選択肢が必要。揺れ動く気持ち。生活基盤。
- ・ その他。人口減少、高齢化が震災で一気に加速した。人手不足。働き手が集まらない。事業再
開や新規進出にためらい。生産者への支援。販路、価格がまだ戻っていない。

さまざまな課題の中で、何ができるか考えながら講演を聴いていただければ幸いである。

(3) 講演内容

◆下枝浩徳さん

葛尾村は東京電力福島第一原発から約25 km圏にある。主な産業は林業と畜産で、自然豊かな村。
原発避難による過疎化は深刻で、2016年6月に避難指示解除されてから5か月後の11月1日現在
の帰村者は99名。将来的にも戻るのは200~300人と見られている（震災前の人口は1,567人）。人
材の不足により起きることを具体的に挙げると、消防団などの地域維持機能が果たせなくなる。

1,500人の村の財政規模は18億円だったが、そこにお金をかけるのはどうなのか？合併するべき、
と言われたことがある。一面ではそのとおりだとも思うが、自分の村が「無くていい」と言われる
のは納得いかなかった。

震災後に自分の中にあった問いは、「『ふるさと』ってなに？」。

父をはじめとする、地域と共に命をつないできた祖先たちがいた。東日本大震災時の父の行動。
浅草神社の宮司の言葉「神様がいるかという質問自体がナンセンス。大事な的是見えないものを
信じきる力」という言葉に感じ入った。そこから、問いへの答えを見つけた。「『ふるさと』はみえ
ない、そして、あるものでなく創るもの」。

活動のミッションは、「資金なし人口なしスキルなしの現状から持続する地域を創ること」。

団体の事業は、パーソナルサポート事業、コミュニティサポート事業、結ブランド商品づくり。(事
例)

- ・ 川内村仮設住宅直売所立ち上げプロジェクト
生活困窮者の困りごと×お店をやりたい住民の夢×農家の野菜の支援
- ・ 川内村風評対策酒造りプロジェクト
農家の困りごと×酒をつくりたい都市住民の夢×酒造メーカーの支援

2017年の活動として、葛尾村でのツアー開催を目指す。田植えから凍み餅づくりまで、通年4回プログラムとし、ツアーを柱として宿泊、食事、産品開発などの小さな生業も地域につくっていく。

昔からあった「結」という互助組織の文化の有効性として、費用がなくても労力が必要な事業ができる、小規模のグループでも始めることができる、結でのプロジェクトが終わった後に住民にスキルが蓄積されていく。

農村地域では住民みんなで協働し、喜びを共有し、社会が豊かになることをシアワセととらえていた。ただ、モノをつくるのではなく、かかわる人の幸せを楽しみながらゆっくりと「地域創り」をしていきたい。

◆廣田拓也さん

会社は穀物の加工業。東日本大震災以降、モノづくりが変化した。会社では生産者の再生産を可能にするというミッションを掲げているが、モノが売れなければ再生産ができない。在庫を抱え、東京都内の青空市場など3年間で200回以上出店した。そこで学んだことは、モノ自体の付加価値を高めるのは限度がある。モノづくりから「コトづくり」のコンセプトを考えた。

(事例) 自家製サングリアの素

自宅でサングリアを作るところから楽しむ。人とモノを結ぶ。

今後のビジョンは、「コトづくり」の先にある価値。モノに付加価値を付けるのではなく、モノにストーリーを付け、そして「とき」を付ける。

(事例) 福島拓景ブランド

福島の観光名所をイラストにし、商品のラベルとして使用。福島でしか買えない商品。

さらに、福島のヒト、モノ、コト、トキをつないでいくことを目指す。

震災直後に妻の出身地である逗子に避難し、現在も二本松と往復しながら二重生活を送っている。神奈川では、原っぱ大学の活動を通じて地域コミュニティについて多くのことを学んだ。

2016年夏には「原っぱ大学ふくしま」を企画、開催した。2017年には段ボールでボブスレーをするイベントを企画している。原っぱ大学では、親子で、遊びを自分でつくる。子どもの可能性を信じる。地域コミュニティの基本は親子だと考えている。

今後もモノづくりと地域コミュニティのあり方を追求していきたい。

◆和田智行さん

震災前に小高にUターンし、ITベンチャーを起業。東日本大震災で被災、避難を余儀なくされ、5か所を点々としたあと会津若松に落ち着いた。インキュベーションセンター¹で企業者支援に従事したあと、2014年5月に小高ワーカーズベースを開いた。

小高は地盤が緩く、地震による建物倒壊も多かった。震災後1年はまさにゴーストタウンだった。

¹ インキュベーションとは、(卵などの) 孵化を意味する英語 (incubation) が元になっており、「インキュベーションセンター」は起業家の育成や新しい事業の創出を支援する機構や施設を指す。

震災当時 12,842 人だった人口は、2016 年 12 月 31 日時点で 9,856 人。2016 年 7 月の避難指示解除後、帰還者数は 1,097 人（約 10%）。

小高ワーカーズベースのミッションは、地域の 100 の課題から 100 の事業を創出すること。まずは暮らしを支える小さなビジネスから。先に帰還するべきなのは住民か事業者かという議論になりがちだが、事業を起こすことで人の出入りが生まれ、課題や障害が自分事になる。小さくてもサイクルを回すことで地域経済に血が流れる。

小高には、電源や Wi-Fi はもちろん、座れるところさえなかった。まずは仕事や打ち合わせができるコワーキングスペースを作った。次に、温かい食事が食べられる食堂（おだかのひるごはん）を開いた。地元の人が集まる地域のコミュニティとして機能した（現在は閉店）。

仮設スーパー「東町エンガワ商店」。コンビニとの差別化を図らなければならない。

HARIO ランプワークファクトリー。アクセサリ製作。女性が働く場所があることで、避難区域の風景が変わる。魅力的な仕事を創れば、人は集まる。若い人に足を運んでもらうためにアニメ制作会社と協力してコスプレイベントも開催した。

故郷を蝕んだ依存体質から脱却したい。地方では企業誘致、工場誘致の話が多いが、採算が合わなければやがて撤退し、また同じこと。小さくてもゼロから 1 を目指す。1000 人を雇用する 1 の事業に支えられる社会ではなく、10 人を雇用する 100 の多様な事業が躍動する社会で暮らしたい。

視点を変えればチャンスが見えてくる。人口 0 から増えていく、右肩上がりの土地。ステレオタイプの価値観では選ばれない地域＝ステレオタイプの価値観が入りこみにくい地域でもある。現代日本唯一で最後のフロンティアと言える。

(4) パネルディスカッション

Q： いつの時点でご家族と共に地元に住まわれますか。（廣田さん、和田さんへ）

A： （和田）2017 年 4 月に小高区の小中高校が再開される予定なので、そのタイミングで家族と小高に戻る。

（廣田）妻が妊娠中だったため原発事故の翌日から逗子に移動。妻子は二本松に戻らないと決め昨年住民票を逗子に移した。子どもが学校に上がったときは二本松に住民票があった。本当は住民票がないと小学校に上がれないが、逗子市は特例を認めてくれた。妻子は逗子に、私は今のところ二本松にと特殊な生活。

Q： プロジェクトを立ち上げるときの資金はどこから調達するのですか。

A： （和田）プロジェクトについては基本的に自己資金。被災した企業に対する補助金などはたくさんあるが、新規開発へのメニューほとんどなかった。最近出てくるようになったが。プラス、ハリオのランプワークなどは三菱商事の支援など民間のお金でやっている。

（廣田）震災前から民間企業だったので自己資金中心だが、六次化支援事業で福島拓景のイラスト費用だけ、3 分の 2 が県から出る補助費を使った。

（下枝）経費がかからないようにする。たとえば参加費がひとり 2 万円程度で済むように組み立てる。必要なものは地域から借りる。書類を作成するなど、お金以外でやり取りを

する。

Q： 事業計画は今いくつぐらいありますか。アイデアを募っているのでしょうか。

プレーヤーは和田さん以外にもたくさん集まっていますか。(和田さんへ)

A： (和田) 事業計画は把握しきれないほどある。アイデアは募ってはいないが、プレーヤーになろうという人は自分でいろいろ考え相談に来る。東京や仙台のプログラマーで移住して起業したいという人。エンガワ商店の店長は東京から移住してきた。そういう人がだんだん増えてきている。

Q： 商品化のアイデア(きっかけ)は何ですか。(廣田さんへ)

A： (廣田) 商品化のベースは生産者の「売れない、売ってほしい」という相談がスタート。楽しさ、わくわく感が足りないと売れない。ドライフルーツは漬け込むといろいろな味が染みておいしくなる。ちょうど二本松市で「福島農家の夢ワイン」株式会社の立ち上げを聞いて、一緒に楽しめないかと考えたのが最初のきっかけ。新規事業の外堀をサポートできるようなアイテムにしようというのがアイデアのルーツ。

Q： (鈴木) 商品化のアイデアという点について。日本酒のネーミングなどはどのように。

(下枝) 福島では米が売れないので酒を造るという話があちこちであるが、売れない。理由は、客と離れているから。酒米では皆、醸造所に米を売るという「入口」から入るが、私は「出口」から入る。欲しいという人を20人ぐらい集めてから企画を練る。アイデアは消費者から。最初は1,000本から造り始め、評判が良ければ伸ばすというやり方。

(和田) 構想を考えておいて、釣り糸を垂らしてマッチしたものを釣り上げるという感じ。具体的に何かを狙っているということではない。ハリオでいえば、こういう働き方ができるものはないかというものを考えているときにハリオの話があった。

(廣田) 福島の問題とは関係なく、すぐヒットする商品など、モノづくりの観点から絶対ない。アイデアを出して寝せておけば、何かのきっかけで(熟して)はぜる。

Q： 住んでいるところと活動している場所は同じですか。

A： (和田) 小高は単身赴任、週末に会津若松に帰るという生活。住んでいるところと活動しているところは別といえる。しかし4月からは一緒になる。

(廣田) 仕事は福島で、逗子ではコミュニティづくり。移動のたびにわくわくしている。

(下枝) 住まいも団体も葛尾にあるが、活動が広範囲なので葛尾にいる時間は少ない。

Q： ふるさととは何ですか(ふるさとの定義、選び方)。

A： (和田) 心の拠り所。永続的ではなく時々行くのも含めて、最終的に帰りたい場所。

(廣田) 家族のいる場所が「ふるさと」の定義のひとつ。私は神奈川県も故郷と思っている。うまく言えないが、以前は「故郷は二本松」と言っていたが、震災後は「福島」と答えるようになったのが、震災前と変わったところ。

(下枝) ふるさととは、記憶、生きた証と思う。村の人や子どもに聞くと、子どもは文化

祭や学校との答えが多く、おじいちゃんやおばあちゃんはお墓という答えが多かった。自分が生きた証を確認したいと思うのではないか。ただそれは過去の話で、震災で外部要因がだいぶ変わったので、新しい定義を作らないと生きた感じがしないのではと思う。

Q： (鈴木) 講演会のテーマである「地域ではぐくむ創造の芽吹き」「住みたい、訪れたい、離れていてもかかわりたい」に関して、できることはどんなことでしょうか。

A： (廣田) 震災から6年たった中で、それぞれの地域で事業をきちんと、ヒト、モノ、カネ、時間という資源を活用して、小さくてもキャッシュフローを起こしていくことが大事。地域で働く人の外部からの移住者と地元出身者のメリット・デメリットを和田さんに聞いてみたい。

(和田) 当社にも東京からの移住者とUターン組がいる。移住者は、地域の外を知っている。大企業勤務や学歴、人的ネットワークなど築いてきた資産は、閉じられた地元だけの人と比べると段違いに違う。地元出身のUターン組はそれに加えて、地元を受け入れられやすい。移住者は地域に溶け込むハードルが高い。そこは私たちがエスコートすることで十分にクリアできる。地元出身者には余りデメリットはない。Uターン組は、ずっと地元にいる人と外部からの人のハイブリッドのような存在。最強。

(下枝) 東京での働き方と地域での働き方には大きな違いがある。福島の大きな産業は第一次産業で、生産性が高く、地域の情報を持っている。東京は生産系よりも二次産業が多い。仕事力が高く、企画ができる。たとえば書類が書けるだけで地域では飯を食べる。地元の人は文章を書くのに慣れていない。

(廣田) 言語化が苦手。言語化、可視化が苦手な人は、地方だけでやっている人に多い。

(鈴木) 外からのお手伝いで可視化ができるのではないか。

Q： (鈴木) 出された質問の中で、心に響いたものはありますか。

A： (和田) 行政からの支援がどうあったのかという点について。災害が起きたときに一般市民が頼るのは行政になるが、行政も被災者。同じように被災して大変な思いをしているのに、住民は責めがち。福島でもあったし、これからいろいろな災害時に起きてくると思う。災害時には被災者優先になるので、私たちのような創業に対する行政サポートが薄くなった。食堂を立ち上げるときに行政に相談に行ったが、関わりたくないオーラが出ていた。行政はいっぱいいっぱいな状況。民間が強引に形を作ることも大事。金銭的、精神的負担はあったが、行政が取れないリスクを民間が取って、それを行政がサポートするのがいいのではないか。

(下枝) 葛尾では村役場の灯が午後10時過ぎまでついている。霞が関かというぐらい。大変な仕事量で、一つのものだけ支援するのは難しい。行政も大変だとは理解している。

Q： 一般の人でも関われる(企画できる)コミュニティづくりの方法にはどのようなものがありますか。

A： (下枝) 「一緒に田植えしませんか」で1年目はいいのではないか。即戦力ではそこで書類を作成してということになるのではないか。

(和田) 現地に足を運ぶ企画ありがたい。ボランティアでも、ツアーでも。その中からコミュニティができてくる。足を運ぶ系の企画がスタートとしていいのではないかな。

(廣田) 原っぱ大学の話をしたが、楽しくないとコミュニティはつくれな。危機感や責任感で半強制的にできあがるものもあるが、自然な形成が理想。遊ぶというコンテンツ。一緒に楽しむと最初のシーズ(種子)ができる。田植えもいいのではないかな。

(下枝) 田植えは田舎のアイデンティティの根底にある。楽しみながら根底にかかわれるのはいいのではないかな。

Q: 外から移住してきた人を引き留めていく方法はあるでしょうか。

A: (和田) 現地のコミュニティに入ってもらうのが一番重要。次に大事なものは、その人に現地での役割を持ってもらうこと。

Q: 最後に参加者へのメッセージをお願いします。

A: (和田) 福島は悲観的に見られるが、現場の人間は楽しくやっていることを伝えたい。現代社会は閉塞感、今後の生き方など、割りと日本中で不安を抱えている。被災地で答えを見つけられるのではないかな。小高は原発から 20 km 圏内。なんでもチャレンジできる、まっさらなキャンパスと同じ。共感されたら来ていただいて、チャレンジしてもらったら嬉しい。

(廣田) 是が非でも福島に来てくださいとか、全力で何かをやってくださいということは全くなく、何かしら福島に限らず知ってもらって、つながるだけで価値があると思っている。フェイスブックでのつながりで十分。つながることがなにがしかのシーズになる。あまり難しく考えて責任感に潰されない程度で、つながってもらうだけで十分に幸せ。

(下枝) 風評と言うが、物が売れないだけでない。震災のときに皆考えたと思う。これで人生いいのかなとか。日本中いろんな災害がある。いろいろな人のところに厄災は降ってくるので、心の備え、考えることが重要では。そのきっかけの一つが福島の役割だったと考えることがある。



開会挨拶



資料展示スペース



講演：下枝氏



講演：廣田氏



講演：和田氏



パネルディスカッション



参加者からの質問の一部



下枝氏、鈴木氏



和田氏



和田氏、廣田氏

別紙 1 広報用チラシ

福島を伝える講演会

地域ではぐくむ創造の芽吹き

～ 住みたい 訪れたい 離れていてもかかわりたい
そんな地域であるために ～

東日本大震災の被災地域では被災者に対する支援が変化の局面を迎え、さまざまな決断を迫られる一方で、「被災地はもう復興したのだろう」と考える人もいるかもしれません。しかし、そうした地域で普通に当たり前の暮らしをするには、まだ多くの課題があるのです。一方で、地域や人に根ざした民間ならではのさまざまな取り組みも生まれてきています。今回の講演会では、民間レベルで取り組んでいる人をお招きし、目指すものについてお話をお聞きします。その地域が「住みたいところ」、「訪れたいところ」、「離れていてもかかわりたいところ」であるために、どのような可能性があるのでしょうか。何が正しいかという議論ではなく、お互いの価値観を尊重しながら、それぞれに共有や協力のできるポイントを見つけるきっかけになればと願っています。



日時：2017年1月14日（土）16:00～19:00

会場：かながわ県民センター2階ホール **入場無料**

神奈川県横浜市神奈川区鶴屋町2丁目24-2（横浜駅から徒歩5分）

定員100名（お申し込みについては裏面をご覧ください）

講演&パネルディスカッション

◆下枝浩徳さん

一般社団法人 葛力創造舎 代表理事。福島県双葉郡葛尾村出身。東京都の一般企業で働いたあと2011年に故郷の福島県にUターン、福島県内で地域コーディネーターとして人脈を広げ、現地や首都圏での交流イベントにも力を入れる。原発避難により急激に人口が減った地域において互助コミュニティの再構成となりわづくりを行う。避難指示が解除された葛尾村での盆踊り復活もコーディネート。



◆廣田拓也さん

福島県二本松市出身。株式会社GNS 常務取締役、特定非営利活動法人リーフ（Leaf）理事長。一部上場企業に勤務後、兄が会社を設立したことに伴い二本松にUターン。順調に売上が伸びてきたところで東日本大震災が発生。既存の事業モデルが崩れ、一部事業の方向転換を図る中でLeafを設立。生産者と共に日々奔走している。



◆和田智行さん

株式会社 小高ワーカーズベース 代表取締役。福島県南相馬市小高区出身。震災前、東京のITベンチャー2社の役員を務めながら南相馬市で個人事業を営むワークスタイルを確立。2014年5月に避難区域初となるシェアオフィス「小高ワーカーズベース」をオープン。100の地域課題から100のビジネス創出を目指す。



共催： かながわ「福島応援」プロジェクト (kfop) <http://kfop.jimdo.com/>
NPO法人かながわ避難者と共にあゆむ会 <http://hinansha-shien.net/>
認定NPO法人かながわ311ネットワーク <http://kanagawa311.net/>
かながわ災害ボランティアバスチーム <http://kanagawavolunteerbus.jimdo.com/>

協力： 一般社団法人 葛力創造舎、株式会社 小高ワーカーズベース、株式会社GNS、特定非営利活動法人リーフ（Leaf）、
神奈川県立かながわ県民活動サポートセンター、特定非営利活動法人 日本ファシリテーション協会、
かながわ東北ふるさと・つなぐ会、公益社団法人 日本青年会議所 関東地区 神奈川ブロック協議会

協賛： azbil みつばち倶楽部、シティアクセス株式会社

後援： 福島県、南相馬市、二本松市、葛尾村、社会福祉法人 神奈川県社会福祉協議会、一般財団法人 神奈川県建築安全協会

別紙 2 参加者アンケート用紙

講演会（2017年1月14日）に関するアンケート

本アンケートは、講師の方へのフィードバック、活動報告、今後の企画での参考のために実施します。ご協力をお願いいたします。

なお、回答は統計として処理し、文章は個人を特定できない形に変更させていただく場合があります。《電子メールでも受け付けます。info.kfop@gmail.com まで件名：【アンケート】でお送りください》

1. 今回の講演会の情報をどこで知りましたか？ 丸を付けてください。

- a. 共催団体による告知
 - a-1 かながわ「福島応援」プロジェクト (kfop)
 - a-2 かながわ 311 ネットワーク
 - a-3 かながわ避難者と共にあゆむ会
 - a-4 かながわ災害ボランティアバスチーム
- b. 登壇者や協力団体による告知
(具体的に _____)
- c. 神奈川県ホームページや Twitter
- d. ふくしま連携復興センターのメーリングリスト
- e. 友人・知人からの紹介
- f. インターネット検索
- g. その他 (_____)

2. 今回参加した理由は？ (いくつでも)

- a. 福島や被災地に関心があるから
- b. 講演者に関心があるから
- c. 講演のテーマに関心があるから
- d. 日程や会場がよかったから
- e. その他 (具体的に： _____)

3. 今回の講演のテーマや進行はいかがでしたか？

- a. よかった b. 普通 c. よくなかった
- (具体的に指摘があれば遠慮なくご記入ください： _____)

4. 今回の講演についてご感想・ご意見など、自由にお書きください。

5. 今後の講演会の企画に向けて、どのような方のお話を聞いてみたいですか？

6. あなたご自身についてお答えください。(あてはまるものに○をつけてください)

性別	男性 ・ 女性
年代	20代 ・ 30代 ・ 40代 ・ 50代 ・ 60代 ・ 70代以上
職業	会社員/会社役員 ・ 公務員 ・ 自営業 ・ パート/アルバイト ・ 学生 ・ 専業主婦 (主夫) ・ その他 ・ 働いていない

別紙 3 参加者アンケート集計結果

参加者数	94
回答数	32

1. 今回の講演会の情報をどこで知りましたか？ ※重複回答は重複先にカウント

a. 共催団体による告知	2 ※
a-1 かながわ「福島応援」プロジェクト (kfop)	14 ※
a-2 かながわ311ネットワーク	1
a-3 かながわ避難者と共にあゆむ会	4
a-4 かながわ災害ボランティアバスチーム	3
b. 登壇者や協力団体による告知	
日本青年会議所	1
c. 神奈川県のホームページや Twitter	1
d. ふくしま連携復興センターのメーリングリスト	
e. 友人・知人からの紹介	4
f. インターネット検索	
g. その他	
かながわ県民センターのポスター	1
新聞やエレベーター内ポスター	1

2. 今回参加した理由は？ (いくつでも)

a. 福島や被災地に関心があるから	25
b. 講演者に関心があるから	9
c. 講演のテーマに関心があるから	15
d. 日程や会場がよかったから	13
e. その他 (具体的に：)	
渡辺代表の近所付き合い	1
原発いじめ	1
福島市出身のため	1
小高区の人 coming いるから	1

3. 今回の講演のテーマや進行はいかがでしたか？

a. よかった	24
b. 普通	4
c. よくなかった	1
無回答	3

(コメント欄)

- ・ ポジティブな意見が聞けて良かった
- ・ コンセプトも企画も（判読不能）もよくつめて作っておられるのが伝わってきます（男性 40 代）
- ・ 非常に前向きで行動的な 3 人、素晴らしいです（男性 40 代）
- ・ ファシリテーションの方の進行がリズムよく軽快だった（女性 30 代）

4. 今回の講演についてご感想・ご意見など、自由にお書きください。

- ・ 浅草寺のお話、0 人から 5000 人、すてきなお話だと思った（女性 40 代）
- ・ 若い方々の前向きな創造的な活動のお話が聞けて、すごく刺激になりました。年寄りとして、直接的には何ができるかと思うと、物を買って応援できればと思いました。（女性 60 代）
- ・ 実情がよく分かった（男性 30 代）
- ・ 事業展開への営業的宣伝が多い。帰還を促す部分が多すぎる。（男性 60 代）
- ・ 福島の若い方達の話聞くことができ、心強く思いました（女性 60 代）
- ・ 昨年に引き続き参加させていただきました。とても気づきの多い講演でした（男性 30 代）
- ・ 3 人ともこのまま持続できればと思う（男性 60 代）
- ・ 質疑応答について事前連絡が欲しかった（男性 40 代）
- ・ まず、講演会のタイトルにひかれて是非参加させていただきたいと思いました。
私たち神奈川県民以上に、とても勇気づけられる講演内容でした。
発想の転換こそが幸福感を改めて持てるヒントであると実感いたしました。（女性 50 代）
- ・ グループで（なかば強制的に）質問とか感想とかを話し合うのはおもしろかったです
「創造」とはいいテーマだと思いました（女性 40 代）
- ・ テンポ良かったです。講演だけでなく、パネルディスカッションや
交流の場があったのも良かった（女性 40 代）
- ・ 元気が出ました（女性 50 代）
- ・ 若い人ががんばっているのを知り、うれしく思った（男性 60 代）
- ・ テーマを見たときは正直ぴんときななかった。しかし 3 人のイキイキしたステキなお話を聞いたら
すっとんと理解できました。自分の理解力、想像力のなさのせい？それともテーマ（題名）の
付け方がよくない？テーマ題名のほうにもう少し工夫が必要かな…すいません。
副題はよいのですが「地域ではぐくむ～」のところは参加したのちに感じるものでは。
同様にチラシも 3 人のイキイキとした副題のようなデザインのほうが私は好きです。（男性 40 代）
- ・ 田植えいいですね。一度行きたいと思います（男性 50 代）
- ・ 何らかの形でかかわっていきたい（女性 40 代）
- ・ 私ができることは何か？かかわりたい、福島で仕事がしたい、福島出身者としてどうするか？
いろいろ考えています（女性 40 代）
- ・ 若い人たちが現社会で身につけている知識、意欲（チャレンジ精神）には
驚かされます（男性 70 代以上）

- ・ 福島の課題に関するプレゼンテーションがわかりやすかった
和田さんのお話を聞いてみたかったので聞いてよかったです
スライドでとまどったのは少し残念でした（女性 30 代）
- ・ 冒頭の所長のごあいさつはやや残念でした。内臓疾患というたとえはどうなんだろう？（女性 30 代）
- ・ 地元がだんだんと元気になっていることが伝わりとてもよかったです（女性 60 代）
- ・ 素晴らしい企画でした。ファシリテーションも大変勉強になりました。
ぜひ継続してこのようなイベントを企画していただきたいです。（女性 30 代）
- ・ 福島を思う心は強くても、思い方は千差万別だということを改めて実感しました（女性 60 代）
- ・ 和田さんの「依存体質からの脱却」というお話に力強さを感じ、とても感銘を受けました（女性 50 代）
- ・ 福島から避難している者として、このような「地域ではぐくむ創造の芽吹き」の会を開催されて
ありがとうございます。被災者への支援が薄れていくことに腹立たしく思っています。
復興住宅に空きがあるにもかかわらず入居者への条件が厳しいのですね。空き部屋を空けては
地域住民が戻る威力がなくなるのではないのでしょうか？（男性 70 代以上）
- ・ 実際にプロジェクトを立ち上げている方々のお話が聞いて参考になりました（女性 50 代）
- ・ 現在の福島県内の被災地で若い「起業家」が困難な状況の中でも明るく元気に活躍していることが
よく分かりました。その点で良かったと思います。

6. 今後の講演会の企画に向けて、どのような方のお話を聞いてみたいですか？

- ・ 普通の人（女性 40 代）
- ・ 20 代、30 代で活躍している人の話（男性 30 代）
- ・ 実際に帰還居住に対しての実感。小高町帰還者の大部分が高齢者であり、
その実感を知りたい（男性 60 代）
- ・ 医療関係、ペット同行避難のこと（女性 50 代）
- ・ 今回と同じ「住みたい」「訪れたい」「離れていてもかかわりたい」と思えるテーマの企画を
今後も続けてほしい（3 人のようなみなさんの今後）（男性 40 代）
- ・ 原発いじめ、福島県内の原発いじめや震災いじめ、岩手・宮城からの原発いじめや震災いじめ
岩手・宮城県民は他都道府県内の震災いじめはないのか？（男性 40 代）
- ・ 福島の被災地に暮らす高齢者、障がい者、子どもたちの状況が分かる講演会（男性 70 代）

7. あなたご自身についてお答えください。

性別

男性	14
女性	19

年代

20 代	
30 代	4
40 代	11

職業	50代	7
	60代	7
	70代以上	3
	会社員/会社役員	9
	公務員	4
	自営業	5
	パート/アルバイト	4
	学生	
	専業主婦（主夫）	2
	その他	2
	働いていない	6